本当の心（メール）

私の名前はハルナ。私の親友はミナミとマユ。私たち三人は家も近くだったので、小さい頃から一緒に遊んでいた。小学校の頃には何度かけんかもしたけれど、いつもすぐに仲直りしていた。ミナミは思ったことは何でも言わないと気が済まない性格なので、よく男子とも言い争いになることがある。自分の意見をはっきりと話せるミナミを、私はいつもうらやましく思っている。おしとやかで静かなマユはいつも聞き役。しゃべりまくっているミナミの横で、相づちをうっている。

「私たち、性格が全く違うのに、どうして仲がいいのかな？」

ミナミの言葉に私は答えた。

「話が合うからだと思うよ。」

マユがうなづいてくれた。

「そうだね、一緒に話をしていて楽しいから、仲がいいんだよね。」

私もミナミの言葉にうなづいていた。

今年のクラス替えで私だけ別のクラスになってしまった。クラスや部活は別々でも終わるのを待って、三人で一緒に話をしながらいつも帰っていた。

今日は、ミナミが部活の片付け当番。私はマユと一緒に、ミナミが来るのを待っていた。

「いいな、二人は同じクラスで。」

「うん、あのね。」

そう、マユが言いかけたとき、

「お待たせ～！」

ミナミが勢いよく現れた。

そこからは、ミナミのマシンガントークが炸裂（さくれつ）した。今日、クラスであったことを事細かに話しまくる。ミナミの話を聞いていると、自分のクラスより、ミナミたちのクラスの事に詳しくなって

しまいそうだ。
「そういえば、ハルナのクラスでは、学級委員と委員会は決まったの？」
「私のクラス、中心になる人いないから、学級委員長も決まらなかったんだ。明日の放課後も続きの話し合いするんだって。」
「うちのクラスは、私が話を進めるから、全部決めちゃった。」
そうか、ミナミがクラスの議長ならすぐに決まるよね。
「ところで、ミナミは何委員？」
「私は学級委員長。もちろん、立候補したんだ。マユは保健委員。危なく生活委員になるところだったんだから。」
「ふ～ん、マユはまじめだから、生活委員でもいいんじゃない？」
私はマユの方を見ながら聞いた。すかさず、ミナミが答えた。
「生活委員は朝に服装点検をするんだよ。マユが男子に『Ｙシャツのすそ入れて』なんて言えると思う？だから、保健委員に推薦したんだよ。」
ミナミたちのクラスの話を聞きながら、私は何に立候補するかを考えていた。

携帯電話を買ってからは、三人でメールのやりとりをしている。帰りの時間に話しきれなかった事でいつも盛り上がっている。
あっ、マユからのメールだ。
『私ね、生活委員やってみようかなと思っていたんだ。』
『マユ、どうして？』
『私ね、引っ込みじあんだから、ミナミちゃんを見習おうと思って。』
『じゃあ、マユ、生活委員をしたら？』
『でも、もう決まってしまったから、保健委員がんばるよ！』

マユとのメールのやりとりの十分後にミナミからメールが来た。
『ハルナ、実は今日の話合い大変だったんだよ。』
『あれ？すんなり決まったんだんじゃないの？』
『ちがうよハルナ。はっきりマユが言わないから、もう困っちゃったんだ。』
『マユは生活委員をやりたいって言ってたよ。』
『そうじゃないんだって。私、ちゃんと聞いたよ。』
『あれ？？そうなの？』
私はどっちの話が正しいのか分からなくなってきた。
ミナミとのメールのやりとりの後、どっと疲れを感じた。三人で話しているときにはあんなに楽しいのに、どうしてメールだと疲れてしまうのかな？
私は携帯電話を机に置いて、母のいる居間に向かった。

私は母に、今日の帰りの話のこと、マユとミナミのメールの内容を話した。
「おかあさん、私、誰の話を信じればいいの？」
「三人でもう一度話してみなさい。直接話すのとメールのどっちをハルナは信じるの？メールだけでは伝わらないことがたくさんあるんじゃない？」

私は部屋に戻ってに帰って、母の言葉を思い出しながらしばらく考えた。
「二人の誤解を解くためにはどうしたらいいだろう」
私はミナミとマユ宛に同じメールを書いた。
『ミナミ、マユ、明日の朝、三人で話そう。』
直接話せばわかってもらえる。そう信じて送信のボタンを押した。